

△池田劇場1/50復原模型

久保田家文書と設計図

神奈川県建築史研究室では2006年度から高松市歴史資料館に寄託された久保田家大工文書の調査を行っている。その中に、「池田劇場建築工事設計図」と書かれた8枚の図面がある。

各図面には平面や立面だけでなく、部材の寸法まで書かれた詳細図も含まれている。すべての断面図や屋根伏図がなくとも当時であればこの図面で実際に建てることのできたと考えられ、この8枚の図面は、実際に建築するための「設計図」であったと考えることが可能である。



△久保田家文書「池田劇場建築工事設計図」

所在地と建築概要

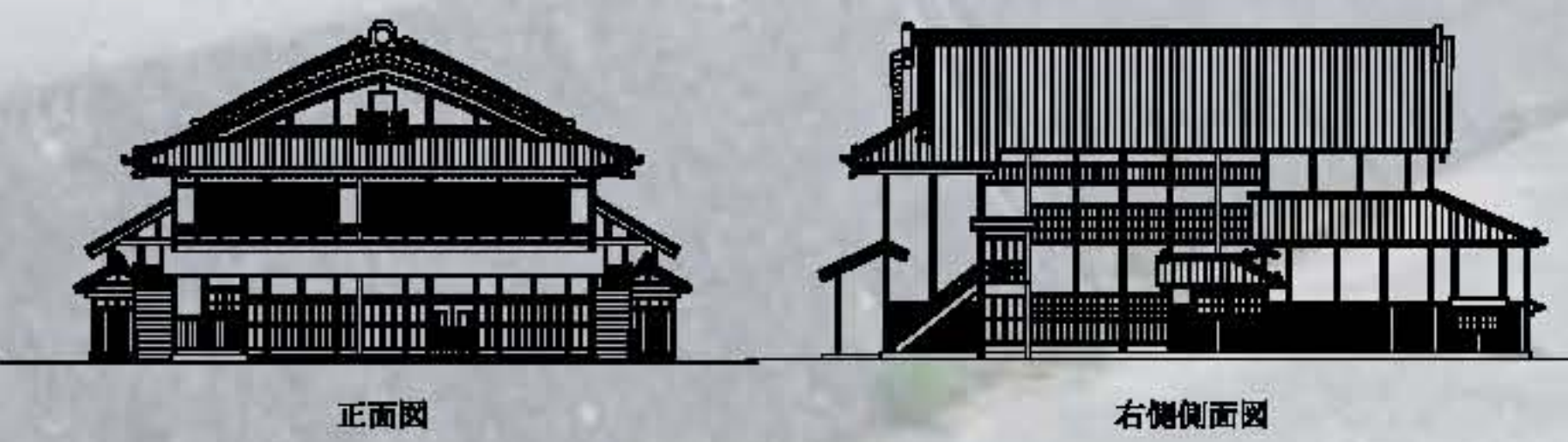
久保田家の図面にある配置図より、池田劇場の所在地は小豆島池田町(現在の小豆島町池田)であることがわかった。

図面を見ると、池田劇場は木造二階建、正面入母屋造、背面切妻造の屋根を掛け、後方に下屋を回す。正面には歌舞伎劇場の特徴でもある檜を掲げ、内部の観客席は中央を桝席とし、花道を備えた本格的な大劇場であることがわかる。(図1)

現在敷地は駐車場となっており、池田劇場は存在しないが、地元の方の御教示によりその興味深い歴史と様相が明らかになった。



本研究の目的は、小豆島池田劇場について、その建設経緯と様相について明らかにすることである。



△図1 池田劇場図面(久保田の図面より作図したもの)

がかりにこれが小豆島池田劇場であることを突きとめ、現地に行って地元の人たちから色々聞き取りをして、かつてここに確かに池田劇場があったことを確認し、次に、岡山県倉敷市から移築されたこと、工事中に台風で一度倒壊したこと、等を知ると、それらを受けて倉敷へ行き、小豆島へ移築したのは倉敷劇場という劇場で、それは何と高松市から移築したものであったことなどを次々に明らかにしていった。

建設の背景はこのように複雑で、その解明は大変難しかったが、

倉敷での現地調査より
高松にあった観楽座を移築した倉敷劇場があることがわかった。



△倉敷劇場 △当時の看板

倉敷劇場跡地に現在お住まいの御主人より…

(倉敷劇場を)解体して小豆島へ持っていったけど、台風で倒壊したって聞いてるよ

建設経緯と変遷 池田劇場は旅する劇場であった



池田での聞き取り調査より

(久保田の図面を見て)そうそう、たしかにここにありましたよ！池田で一番立派な劇場でした

倉敷から材を持ってきて建てようとしたけど、建築中に台風で倒壊したって聞きましたよ



△現状敷地(駐車場となっている)



△池田町に建築中の劇場が倒壊したことについて書かれた記事『香川新聞』昭和12年9月12日

明治中期



高松市塩屋町に観楽座が建てられる。

大正7年~8年



観楽座が解体され、その材が倉敷へ運ばれ倉敷劇場が建てられる。

昭和11~12年頃



倉敷劇場が解体され、その材が小豆島へ運ばれる。この頃久保田の図面が書かれたと考えられる

昭和13~14年頃



小豆島に移築しようとした劇場が建築中台風で倒壊し、その後ほぼ同様の劇場が久保田の手により再建される。

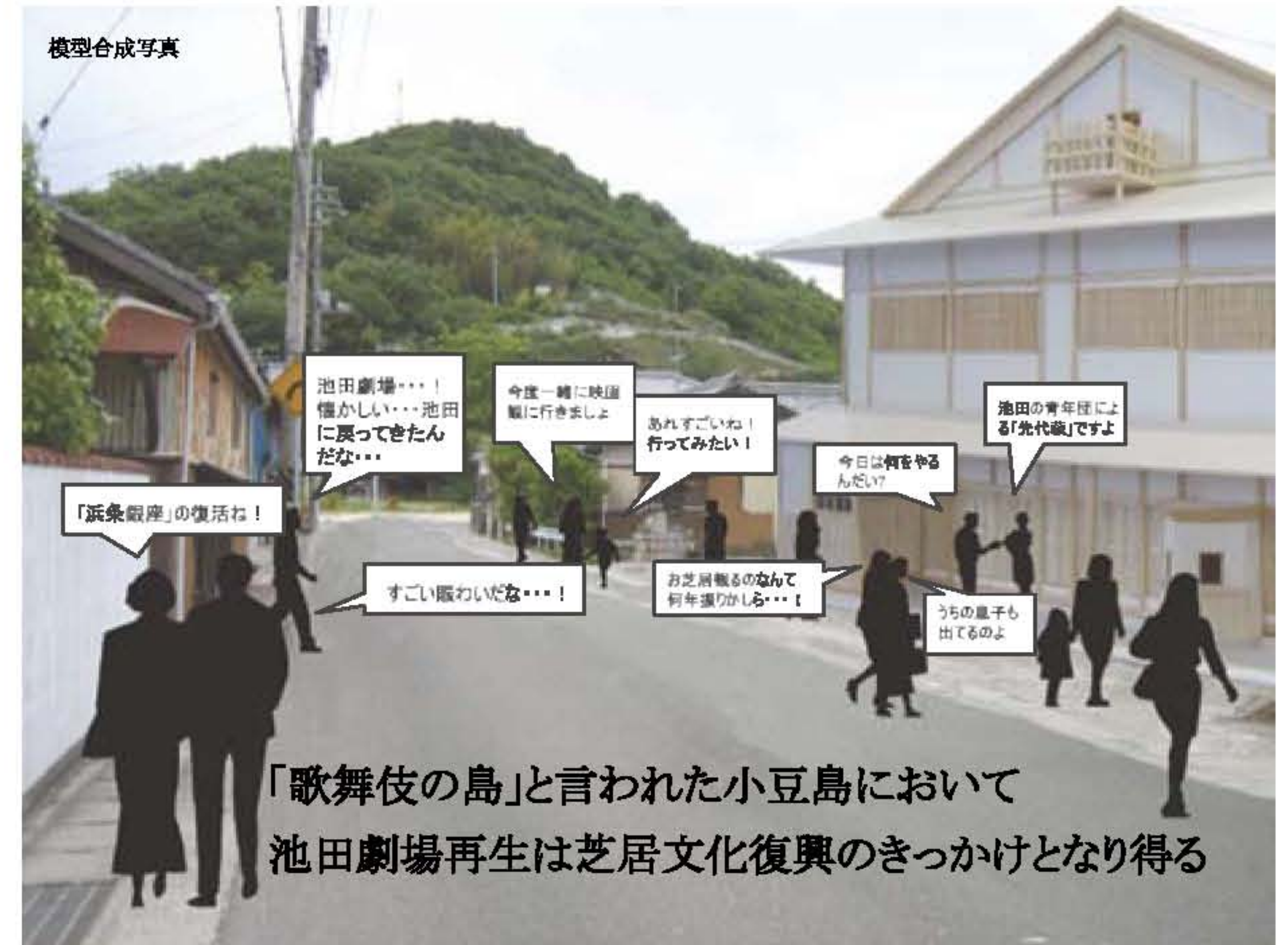
久保田家文書にある池田劇場は池田劇場は、小豆島の池田町に確かに存在し、また大変興味深い歴史を歩んできたことが明らかになった。

芝居小屋の価値は建築的な特殊性だけでなく、地元の人々やまちにとってどれだけ大切なものであるかということにあり、小豆島においても地芝居文化は現在も生き続け、定期的に公演が行われている。そのような土地で当時の劇場に関する図面が発見されたことや様相が明らかになることは大変興味深い。

本研究が池田劇場再生の第一歩となることを望みたい。



敷地現状



「歌舞伎の島」と言われた小豆島において
池田劇場再生は芝居文化復興のきっかけとなり得る

講評

この論文は、昭和46年ころまで瀬戸内海小豆島に存在した池田劇場について、建設背景や建物の様相などを追求したものである。池田劇場を調べるきっかけは、高松市香西本町の久保田家に伝来した大工文書の中に池田劇場の設計図が発見されたことである。この劇場がどこに現存したか、などが全く不明で、それを明らかにしようということから研究が始まった。と書くと、ことは簡単そうに見えるが、最初は情報が少なく、研究は困難を極めた。峠絢子氏は熱心に解明に取り組み、まず図面の中の配置図に記入された地名を手

当時の新聞を岡山県立図書館のマイクロリーダを何日も読み込んで事実関係を知るなど、地道に、そして熱心に取組んでいった。一方、金丸座をはじめとする伝統的な劇場も実際に調査を行い、歌舞伎劇場の特色について情報を収集し、池田劇場の図面内容と対照させることによって、池田劇場の様子も明らかになり、模型を作製し、これを池田町の人に見せてさらに聞き取りを重ねた。

この論文は、以上の努力の結晶として成立したもので、内容の充実度、正確さは実に高い水準にあり、学科のディプロマ賞を受けたの

みならず、関東地域の大学の卒論発表会である建築史交流会でも他大学の諸先生からその発表ぶりも含めて高く評価され、見事入賞を果たしている。